

事業報告書（令和7年度）

事業名 親子で育てる無農薬・無化学肥料米づくり

団体名 岡山まごころ給食審議会 担当者名 荘司かおり

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、講師、参加対象者、人数、内容等）

◆種まき&苗代（なわしろ）作業 2025.5.11（当会関係者：10名）

今年も6月の田植えで使用する苗の育苗会社を訪問し、種まき作業を体験させていただいた。苗箱に種もみと土を入れる作業を行った後、苗を育てる「苗代」と呼ばれる田んぼへ移動し、苗箱を丁寧に並べる工程を体験した。

本年度は、稲作を学んでいる高校生とともに参加する機会を得た。世代の異なる参加者が同じ現場で作業を行う中で、それぞれが自分の役割を見つけながら協力し合う姿が見られた。種をまいた後の苗箱は衝撃に弱く慎重さが求められる一方で、作業全体を滞らせないためのスピードも必要であり、その両立の難しさを体感する時間となった。また、種まきが稲作の出発点であると思いがちであるが、その前段階にも多くの準備工程があることについて説明を受けた。こうした一連の工程を知ること、日々家庭で当たり前のように食卓に並ぶお米が、多くの手間と人の力に支えられていることを、親子それぞれの立場で実感する機会となった。



◆田植え 2025.6.29 @岡山市東区（実施人数：57名）

3年目となる今回の田植えは、昨年度に引き続き一般参加者を募って実施した。圃場が広いので、全体の約3分の2の範囲を2列に分かれ、手作業で植え付けを行った。

実施後のアンケートでは、「食卓に並ぶお米になるまでの過程を子どもに説明する際、田植えの体験を交えて話せるようになり、子どもの理解の深まりを感じることができた」といった声や、「改めてお米づくりの大変さを実感した」との感想が寄せられた。体験が家庭での対話につながり、親子での学びを深める契機となっていることがうかがえた。

また、当会とつながりのあるマルシェにも参加いただき、“お米”をテーマとした出店を通して、生産と消費の双方を体感できる機会を設けた。これにより、農と食のつながりをより立体的に理解する場とすることができた。



◆草取り作業 2025. 8. 17 @岡山市東区 (実施人数: 14 名)

今年借用した圃場では、成長すると秋には木のように大きくなり、コンバインでの収穫作業が困難になる「ヒレタゴボウ」が多数発芽した。そのため、真夏の酷暑の中、手作業による抜き取りを実施した。

田植え後には支援者による除草機作業も行ったが、実施の適期を過ぎていたことから雑草の繁茂を十分に抑えることができず、草が稲作へ与える影響の大きさや、農作業には適切な時期があることを実体験として学ぶ機会となった。

本活動は、お米づくりの工程の一端を現場で体験的に理解する貴重な機会となり、参加者にとって農業への理解を一層深める取組となった。



◆稲刈り 2025. 11. 2 @岡山市東区 (実施人数: 計 39 名)

本年度の稲刈りは、鎌による手刈りとコンバインによる機械刈りを同時並行で実施した。まず、圃場の一部において地面がやや高く、機械作業が難しいと見込まれる箇所について、鎌を用いた刈り取りを行い、刈り取った稲を藁で束にする作業を体験した。稲に雑草が混在している場面も多く、当初は作業に苦戦する様子が見られたが、子どもたちを含め、次第に要領をつかみ、作業は円滑に進行した。

また、本年度は 6 条刈りの大型コンバインへの乗車機会を得ることができたため、親子で操作を体験し、機械による稲刈りについても理解を深めることができた。一方で、足踏み脱穀機や唐箕(とうみ)といった従来型の器具を用い、刈り取り後の調製作業も実施した。

これらの取組により、手作業と機械作業の双方を比較体験する機会を提供するとともに、従来の農具の仕組みが現代のコンバインに応用されていることへの気づきを促した。参加者が持続可能性の観点から農業技術の継承や発展について思考を深める契機となった。



◆子ども食堂等への収穫米寄贈 2025. 12

子ども食堂の運営や食育推進に取り組む各種団体およびこども園に対し、当会で収穫した米の一部寄贈を実施した。多数の寄贈先へ届けことができ、稲作体験を通じた ESD (持続可能な開発のための教育) としての本活動の趣旨を広く周知する機会となった。

また、寄贈先の活動における参加者に実際に食していただく機会を得ることで、生産から消費までのつながりを実感してもらう取組となった。



<寄贈先>

- ・シェフ☆きっず岡山（岡山市中区）
- ・みんなの保健室 soranji（岡山市北区）
- ・NPO 法人まんなか（岡山市中区）
- ・食育こどもえん はぐっこ（岡山市北区）
- ・つしまみんな食堂（岡山市北区）
- ・こども食堂 岡ちゃんち（岡山市北区）
- ・らいふ食堂（岡山市南区）



2. ESDの視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

1. いわゆる「令和の米騒動」とも言われる米価や供給を巡る社会的動向も背景にあり、本事業に参加した方々や収穫米を受け取られた方々からは、「お米のありがたさを改めて実感した」との声が多く寄せられた。また、日本の農業の現状や課題について「自ら調べてみたい」「家庭でも話題にしたい」といった意見も見られ、社会課題を自分事として捉え、主体的に学ぼうとする姿勢への変化がうかがえた。
2. 家族で実体験したことにより、日常の食事の時間において、お米の恵みや地域農業の役割について、子どもを交えて話し合う機会が生まれたとの声があった。体験が家庭内での対話につながり、次世代への意識醸成に寄与していることが確認できた。
3. 稲作3年目となる本年度は、過去2年間とは異なる圃場で実施し、大規模農業法人の支援を受けながら取り組んだ。これにより、団体として新たな農業形態に触れる機会を得るとともに、技術的知見や運営面での学びを深めることができた。

②どのように学び合いを取り入れたか

本事業では、「実体験」「比較」「連続性」「課題の共有」を柱とし、参加者同士が気づきを持ち寄りながら学びを深める機会づくりを行った。

1. 手作業と機械作業の双方の体験（比較の視点）

当年度も、手作業と機械作業の双方を体験できる機会を設けた。優劣を判断することを目的とするのではなく、それぞれの利点や課題を実体験として理解し、農業の実情を踏まえたうえで今後の活動にどのように生かすかを考える契機とすることを意図した。具体的には稲刈りでは手刈りとコンバイン刈りを実施した。さらに、脱穀作業についても家庭での手作業と稲刈り時の機械作を組み合わせで行った。こうした比較要素を取り入れることで、持続可能性の観点から多様な選択肢について思考を深める機会を創出した。

2. 自宅作業の実施（体験の連続性）

手刈りした稲の一部を自宅へ持ち帰り、乾燥・脱穀・粃摺りといった収穫後の工程を手作業で体験する取組を行った。特に粃摺り作業は手作業では難易度が高く、親子で試行錯誤しながら取り組んだという意見が寄せられた。この過程を通じて、収穫から食卓に並ぶまでには多くの工程があることを実感し、日常的に食べているお米への感謝の念をより一層深める機会となった。

3. 種まきから食卓までの一連の体験（学びの連続性）

当年度は、苗づくりのための種まきから田植え、稲刈り、収穫後作業を経て、実際に食事としていただくところまでの一連の工程を体験することができた。単発の体験にとどまらず、農から食への流れを継続的に体験することで、より理解を深めることができた。

4. 日本の食をめぐる課題の共有（課題認識の醸成）

農体験時では、「日本の食料自給率」や「食料安全保障」といったテーマをも出すことで、農業が直面する現状や課題について参加者間で会話を交わすことで、社会的課題としての認識を深める機会となった。事後アンケートにおいても、日本の食をめぐる課題について「自分なりに調べてみたい」との意見が見られ、主体的な学びへとつながっていることが確認できた。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

1. 実体験と比較を通じた学びの深化

実体験は参加者の印象に残りやすく、土に触れる喜びや楽しさを実感する声が多く聞かれた。田植え参加者からは「稲刈りにも参加したい」、稲刈り参加者からは「来年度の田植えにも参加したい」といった継続参加への意欲が見られ、体験を通じて学びをさらに深めようとする姿勢の醸成につながった。

また、「周囲にも声をかけたい」との意見も寄せられ、参加者自身が学びの担い手として行動しようとする意識の高まりが確認できた。

2. 親子参加型の体験活動

親子で体験を共有することは、思い出づくりにとどまらず、その後の家庭内での共通言語となり、食や農について話し合い、考える機会の創出につながると考えている。

当年度も、圃場でのフィールド体験に加え、自宅ではお米の掛け作業を取り入れることで、家庭内でも親子が協働して作業に取り組む機会を設けた。これにより、日常的に口にするお米について、親子双方の理解を深める取組となった。

3. 収穫米の活用による学びの社会還元

収穫米を子ども食堂等へ寄贈することで、当会の活動成果を多くの方に実際に味わっていただく機会を創出した。

あわせて、寄贈先の活動を通じて、本事業の趣旨や地域農業の現状について消費者にも情報が共有され、体験で得た学びを地域社会へ還元する取組となった。

3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）

1. 参加者範囲の拡大と学習内容の深ぼり

天候の影響で稲刈りは1週間延期となり、当初見込みより実参加者数は減少したものの、フィールド体験としては総じて昨年度を上回る参加者に体験機会を提供することができた。

また、本年度は大規模農業生産者の支援を受けたことにより、大型機械の操作体験や、大規模経営が増加している背景等について直接学ぶ機会を得た。これにより、日本の農業構造の変化や担い手不足といった現状課題を具体的に理解する時間となり、ESDの観点から、社会構造と自らの暮らしを関連付けて考える学習機会を創出することができた。

2. 収穫米の販売を通じた啓発と持続可能性の共有

本年度も無事に収穫を迎え、収穫米の一部を販売することができた。購入者の多くは、当団体の活動趣旨や持続可能な農と食の在り方に関心を寄せる方々であり、購入・実食という行動を通じて本事業の理念を共有する機会となった。

生産過程を知ったうえで消費するという体験は、単なる物品購入にとどまらず、消費行動そのものを学びの実践へと結び付ける取組となった。これは、持続可能な生産と消費の在り方を体感的に理解するESDの実践的成果といえる。

3. 子ども食堂等への寄贈による地域循環の形成

市内の子ども食堂等の団体へ収穫米を寄贈し、活動の中で活用していただいた。多くの親子が関わり育てた米を、地域の別の多くの親子が食するという循環が生まれ、生産と消費を地域内でつなぐ具体的な実践となった。

この取組は、単なる寄贈支援にとどまらず、食を媒介とした地域内循環モデルの一端を担い、農と食のつながりを可視化する成果となったと考える。また、受け取った側においても、食材の背景にある生産過程や地域農業への関心を高める契機となり、持続可能性への意識醸成に寄与することができた。

4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域のESDの取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

本事業を通じ、土に触れる実体験から実際の喫食に至るまでの一連のプロセスを体験することにより、参加者が食と農のつながりをより体感的に理解できることを改めて確認した。

本年度は、いわゆる「令和の米騒動」とも言われる社会的動向の影響もあり、食と農の持続可能性に対する危機意識や関心の高まりが見られた。一方で、こうした関心を一過性のものに終わらせず、継続的な学びと行動につなげていくことが今後の課題である。

当会としては、引き続き本事業を継続・発展させることで、実体験に基づき主体的に考え行動できる担い手を地域内に着実に増やしていきたい。

今後の展望

— 子育て世代（消費者）だからこそその発信力の強化 —

本事業を通じて得られた当団体の強みは、日常的に食を担う消費者、とりわけ子育て世代の保護者という立場から、自らの農体験を生活実感を伴って周囲に発信できる点にあると考える。過去3年間の事業実施により、生産者から直接話を聞く機会を重ね、農業現場への理解を着実に深めてきた。加えて、別事業として実施した映画上映会（「百姓の百の声」〔2025年3月・岡山市東区・来場者260名〕、「弁当の日」上映会&講演会〔2025年9月・来場者220名〕）を通じ、当会の活動認知は着実に広がっている。

今後は、これらの基盤を生かし、

- ・食と農のつながりの重要性の継続的な発信
- ・体験と対話を組み合わせたESD実践の深化
- ・地域内での生産・消費・学びをつなぐ循環の強化

に取り組むことで、岡山地域における持続可能な社会づくりの担い手育成に寄与できるような活動を行っていききたい。